
FF部

BURN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FF部

【Nコード】

N0771Z

【作者名】

BURN

【あらすじ】

ふと、口をついて出た嘘。

焦りだったのだから、恥ずかしかったからなのか今となってはわからない。

でもそこから確かに物語は始まった。

雪影町。そこは妖精のいる町。

主人公。皇月洋輔は部活を立ち上げる。

最初の部員、羽美川悠里。彼女との出会いが彼の運命の歯車を回し始める。

一組の男女の妖精をめぐる物語。

ブローグゝ入部希望者ゝ

「よくぞ聞いてくれた、ここはFF部。 ファイナルファンタジ
ー？ 違う違う。」

FREE FORTH。ここは自由の力というわけだ。 さ
あ入部届を書くといい」

●

私立雪影高校。 地方の自称進学校ではあるが一部の人間は模
試でも全国上位を取ったり、 全国規模の賞を取ったりとなんとも
言えない現状の学校である。

そして俺は先週から二年生。 現状としては空中浮遊しているよ
うに不安定。

だから、 俺は部活を立ち上げることにした。 惰性で一年間続
けてきた運動部は辞めた。 結局のところ休みたいだけなのかもしれ
ない。

部活を楽しむ心はもうなかった。 部員とも仲は良かった。 「
一体なんのためにやってるんだ？」という疑問に対し、答えが出な
かっただけなんだ。

FF部。 FREE FORTH。 自由の力。 とりあえず楽しく毎
日生きていこう、というのが方針だ。

部室は現在使われていない小会議室を使わせてもらっている。 入
り口から見て正面に大机。 そして机の辺に一つつつ椅子が置いて
ある。

そして今入部希望者第一号がやって来た。 名は羽美川悠里。
腰まで届くほどのブラウンの髪の毛。 丸みを帯びた輪郭とくりくり

した瞳にはどこか幼さを感じさせる。 学年、 いや学園内でも有数の美女だと言って問題無いだろう。

「で、この部活は何をする部活なの？」

透き通るように響く声。右手でブラウンの髪の毛を弄りながら俺に聞いてくる。

「よくぞ聞いてくれた、ここはFF部。 ファイナルファンタジー？ 違う違う。」

FREE FORTH。ここは自由の力というわけだ。運動部や文化活動に疲れた人間の安息地。

己の自由を有効利用し、毎日を有意義に過ごすための部活なのだ。 さあ入部届を書くといい」

机に大きな音を立てて、入部届を叩きつける。 だが羽美川は仏頂面のまま立っている。

少しずつ叩きつけた紙を羽美川へと近づける。 さあ、早く受け取ってくれ。

ようやく言いたいことがまとまったのか口を開いた。しかし、

「どこから突っ込めばいいのやら・・・。 ようするに何もしいワケ？」

実際のところ、考えがまとまったのではなく、ただ呆然としていただけだったのだ。

一瞬の間。 言葉に詰まる俺。 返答を待つ羽美川。 だがその間が連続した後。

「…………… 本当に何も無いわけね。 来るだけ無駄だったわ。 さようなら暇人さん」

出口に振り返りながら、少し手を挙げバイバイのジェスチャーを作る。

「ちょっと待てええええええええい。あくまでも、あくまでもだ。それは表向きの理由だ。本当の理由はちゃんとある」

こちらの毅然とした態度に少しは期待した態度を見せる羽美川。本当のことを言おう。理由なんてない。考えなんてない。

「へえ。なら聞かせてもらおうじゃない。あと表向きの活動内容取り繕って偽装してまでする必要なことがあるの？」

「も、もちろんだ。とりあえず部活でするってことは部費が出るってことだ。部費が出るって大事じゃね？」

ああ、一瞬で考えた言葉に相手を納得させることができるわけがない。

「やっぱり…帰らせてもらうわ」

「目的をまだ言っていないぞおお!!」

「なら早く言つてよ。時間は無駄にしたくないんだから」

まだ羽美川も俺に幻滅しているわけではない。そしてこちらも期待を裏切るわけにはいくまい。

いや嘘を吐いてでも…、ここで部員を逃してなるものか!!

「それはな・・・」

「それは？」

「妖精探しだ」

再び沈黙。……ああ分かつてる。誰もこんな事信じない。

嘘の下手さに穴があったら入りたくなる。

「…………面白いわね」

？こいつ、面白いつて言ったか？

「FFってFairy Find 妖精探してところかしら？」

Search for a FairyでSF部の方が正しいでしょうけど、まあ目を瞑ってあげるわ
それにこの町には妖精の噂が結構あるしね。ほら、8年前の「妖精隠し」。あなたも知ってるでしょ？」
「ああ、俺もそれに巻き込まれた。当時のことは覚えてないけどな」

よくわからないけど信じたのか？

「でも悪いけど、今日は用事があるから帰らせてもらうつわ。入部届を書いておくから明日からよろしくね」

半ば呆然とさせられている俺をよそに、羽美川は出ていく。
ドアノブに手をかけ、しかし何か思い出したようにこちらを振り返る。

「あ、そういえば聞いてなかったわね。あなた、名前は？」

「皐月。皐月 洋輔だ。よろしくな羽美川」

「私の名前は知っているのね」

どこか嬉しそうに羽美川は微笑む。

「じゃ、二度目になるけど明日からよろしくね」

今度こそ羽美川は部屋を出ていった。

…なんというか。部屋を出るだけなのに絵になるな。
記念すべき部員さつそく出来た。窓から外を見る。野球部、サッカー部、ラグビー部等さまざまな部活が活動している。
外からは快活に響く運動部の声がこの部室にも響いてくる。

「さて、明日からは妖精について勉強するかな」

妙な所で真面目な俺であった。

クラスメイト

5月。桜もすでに散り、枝には次の葉をつけるため若葉が出来上がろうとしている。

2年生は以前のクラスとの友達と一緒に過ごし、なかなか友達をつくろうとしない人やあるいは逆に積極的に趣味やニュースの話題で友達をつくろうとする人もいる。

俺は前者だ。偶然趣味の話題で気があった友達が今回も同じクラスである。

正直言って俺はテンションは高いほうだと自負していたのだが、朝は無口で話しかけづらい、というのが周りのイメージらしい。

去年のクラスでは俺の麻と昼のテンションの差が激しすぎるということで、クラスメイトは朝はなるべく声をかけないように気を使ってくれていたらしい。いまさらだが申し訳ないと思う。

朝のホームルームが終わり、多くのクラスメイト友達との会話のため席を立つ。

…眠い。

席を立たずに、机の中から本を取り出す。 ”雪影町 妖精の住

む町”

妖精探しを部活の目的としてしまったためにとりあえずボロが出るのを防ぐためにひと通りの知識を身につけようと考えた。

重くなっているまぶたを開け、意識を覚醒させる。

表紙を開き、ページを開に手をかけた時、

「おーい、皐月。何読んでるんだ？」

椅子に座っているこちらに向かい合うように、俺の親友、上杉聡は移動し表紙を覗き込む。

「妖精？ そういえばお前部活を作ったんだっとな。それと関係

があるのか？」

「ああ、どうやら俺の部活は妖精を探することになったらしい」
よく分からないというように首を傾げる上杉。

…いやほんとなんでこうなったのだから。

今度こそページを捲る。

妖精が目撃され始めたのは明治。晴や冬に多く目撃され、夏にも稀に見かけられていたらしい。

現在でも目撃証言もある。

姿形はどの証言も一致しており、透き通るような白い髪と肌、服もワンピースに近いものらしい。

ページを更に捲る。次第に年代は新しくなっていく。

…この事件は…

ある項で手が止まる。

それは恐らく最も多くの人間が妖精を目撃した事件。

「妖精隠し事件…」

上杉も眉を潜め、しかし空気を悪くしないようにすぐに話題を振ってくる。

「俺も妖精見たことあるんだ。その日は小学校の集会の日でさ。

上級生と手を繋いで一緒に体育館で楽しく遊んでた。でも、気がついたら真っ白くて何も無いところにいたんだ。

ホント不思議なところだ。体が嘘みたいに軽いんだ。それからいろんなところに移動したけど何も無い。

でも周りに人の気配は感じるんだ。だから、どこか安心できた。」

どこか懐かしむように話す上杉。俺もそうだが妖精隠しに遭った人は恐怖や怒りは覚えていない。

何も危害がなかったのなら怒る理由もないだろう。

上杉は続ける。

「それで自分は生きてるってことを実感した瞬間、目の前が明るくなった。

そのときに妖精を見たんだ。俺は妖精に手を引かれてその空間から出れたんだ」

お互いにあの事件は妖精の仕業だったのかわかっていない。もしかすると妖精が俺達を助けてくれたのかもしれない。

「…そうか。これは俺の想像でしかないけど妖精ってのはいわゆる神隠しとかを起こしているんじゃないかって、

巻き込まれた人を助けているんじゃないのかと思うんだ」
特に意味のない想像。ただ場を良く保つためのだけの言葉。

…だけどこの言葉を確信に変えるための部活だ。
秀才の羽美川悠里もいるしなんとかなるだろう。

チャイムの音が黒板の上のスピーカーから響く。

「んじゃまたな」

上杉が席へ戻る。

…部活までに本は読んでおこう。

机の中の教科書を取る。

前へ向き直った途端、一瞬のイメージが眼前を覆った。

女の子と手を取りあって何も無い空間を駆け出すイメージ。

視界はクリアになりイメージは四散する。

授業は開始され、誰もが黒板へと釘付けになる。

…部活始まらないかな。

テンションの高まりを次第に感じつつ思考を放課後へと馳せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0771z/>

FF部

2011年12月3日16時49分発行